

特別講演

慶應義塾大学大学院
システムデザインマネジメント研究科

教授 手嶋龍一氏

作家／外交ジャーナリスト
1997年から8年間にわたりNHKワシントン支局長。05年独立。翌年発表した「ウルトラダラー」は大ベストセラーに。同時多発テロ事件では11日間連続の昼夜放送を担い、その冷徹な分析は視聴者から圧倒的な信赖を得た。

北海道独立論を考える

慶應義塾大学大学院
システムデザインマネジメント研究科

教授 手嶋 龍一氏

最近、私は北海道に参りますと北海道独立論者にされてしまっていますが、若干のいきさつがあります、ちょうど9.11事件の翌年でした。まだ私ワシントンに在勤していたんですけど、私の母校の岩見沢東高等学校の先生と生徒さんから母校の80周年記念をやるので、ぜひ一緒に来て、討論をしてくれないかということでした。

当時アフガン戦争が起こっていましたし、イラク戦争という時期でしたので、当然ワシントンをあとにできる状況では無かったんですけど、そのときに後輩のみなさんからいただきました題というのがまさに魅力的なものでした。「もし私が独立北海道の大統領だったら」というあまりに魅力的な題にあらがうことが出来ませんで、北海道にやって参りました。

そしてその時に4人の生徒たちの独立北海道の大統領、なかなかの志のある方々で、今もおつきあいをしています。その人たちと一緒に議論をして、独立北海道を考える何か良い参考文献、みんなで一緒に読んで勉強するものがなかなかと思っていましたが、これがまたほとんどありませんでした。この本しか無いということになりましたのが、当時若い人類学者でありました梅棹忠夫さんが中央公論に書きました、日本探検というシリーズの中の『北海道独立論』です。本ももう絶版で手に入らず、北海道の図書館にも無くて、確か東京からとりよせてコピーを送ってあげた記憶がございます。その北海道独立論についても後でお話させていただこうと思います。

北海道独立のことを考えるにつけて、私がいつも思い浮かべますのは、私が十数年にわたって、在勤をいた



しましたアメリカ合衆国一番北にニューハンプシャーという普段はほとんど顧みられることもないような小さな州、カナダ国境に近い、北辺の州です。この州は4年に1度だけ、全米のいや全世界の脚光をあびることになります。なぜならばこのニューハンプシャーという州は全米に先駆けて大統領を選ぶ州として知られているからであります。

アメリカ大統領選挙は日本で言いますと、ちょうどセパレートリーグのペナントレースのような形で、民主、共和両党の党内でそれぞれに指名を争って大統領候補を決める、そしてよいよその段階で勝負がつくということになりましたら、党大会を開いて正式に大統領候補に指名をし、そして11月の4日に民主、共和両党の大統領候補者が一騎打ちをするという仕組みなのです。

その党内の指名争いというのがある意味で、本選挙での指名争い、候補同士の正式な両党の候補同士が争うよりも過激なレースになります。2008年の大統領選挙はまさにその典型。民主党は8年ぶりにホワイトハウスの奪還を目指す、その中で不動の本命候補と呼ばれましたヒラリー・ローダム・クリントンと、その時点でほとんど無名がありました、バラク・オバマという青年政治家がまず党内での争いをしました。その党内の指名争いに最初に舞台を提供しましたのは、アイオワという農業州とともに、このニューハンプシャーという北辺の小さな州であります。

この小さな州は、州の法律で自分のところは全米に先駆けて、まず真っ先に党内の予備選挙、これ英語で言いますとプライマリーというんですけど、プライマリー

を行なうということが1行書かれております。そしてこの1行こそ、アメリカのというよりもむしろ世界の政治史上最大の発明だと言われています。つまりニューハンプシャーという州は1年に及ぶ長くて険しい戦い、これを、先日亡くなりました筑紫哲也さんはワシントン特派員時代に「アメリカンマラソン」と呼んで、その題名で本を書いています。そのように本当に長くて険しい戦いの最初の時の声は、まさにニューハンプシャーという北辺の州からあがる、これがニューハンプシャーの政治的な発明といわれるものであります。

私はこのニューハンプシャーに、戦いの度に、4年毎ですから、もう数回は長く滞在をして取材をしたことがあります。そしてそのときに頭の片隅のどこかで、どうして我がふるさと、北海道の人たちはニューハンプシャーの方式を取り入れないのかと思ったことがあります。

ニューハンプシャーは各州に先駆けて、最初に予備選挙を行なうということが書いてありますから、このニューハンプシャーで最初に勝利の凱歌をあげるということは大統領の座をめざす人達にとって決定的に重要なことになります。大きな政治的影響力といいますと、ニューハンプシャーに部数わずか3万部の小さな新聞があるのですけれども、その社主がワシントンDCに飛行機でやってくると、その社主から支持をもらいたいばかりに、有力な大統領候補や上院議員が、自ら空港に迎えていた光景というのを見たことがあります。

それほどに強大な政治権力をすでに持ってしまっているというところでありますから、そのニューハンプシャーにはバラク・オバマも、そして本命候補でありました、ヒラリー・ローダム・クリントンも、2008年の戦いの幕が上がる遙かに以前、2007年中から、もう何度も足繁く通って、小さな教会ごとに数人という単位で集会を開いていてもらって、そこをずっと巡って行くということをいたしました。

それだけではなくて、ヒラリー・ローダム・クリントンは既に2007年中に270億円近い巨額の政治資金を集めているのですけれども、このほとんど大半の使い道はTVコマーシャルであります。1月の上旬に予備選挙が行なわれるんですけど、それに先駆けて、膨大な数のコマーシャルをそのニューハンプシャーという地方のテレビ局、ラジオ局そして新聞社に投げ続ける。したがってこのニューハンプシャーのテレビ局は、4年間の経費をわずか1週間で稼ぎだすと言われております。その点で巨大な政治ビジネスが成り立っている。私どもは4年

毎に取材に行くのですけれども、ニューハンプシャーの予備選挙が終わったその日に4年後のホテルの予約をする。それは単に予約をするだけではなくて、全部ディポジットを払い込んで事実上もうその段階でお金を払う。で、あとで、キャンセルしてもお金は戻してくれない。なぜならば、ニューハンプシャーのホテルは完全な売り手市場になっているからです。

単に私はそのようなビジネスのことだけを申し上げているのではありません。実はアメリカの上院議員はわずか100人。日本の衆議院議員に比べてあれだけ広い国にも関わらず、100人ですから、その点だけでもかなり質が良いということを申し上げられるのですけれども、その100人の方々は潜在的には全員大統領候補であります。大統領になろうとする人、もしくは自分の親しい人を大統領に押し上げようとする政治家は、まずニューハンプシャーの意向を組んでニューハンプシャーで支持を取りつけなければいけない。

アメリカの政治史上、ニューハンプシャーという北辺の小さな州の意向に反するような政治行動に出た政治家はほとんど1人もいないと申し上げて良いのだと思います。これは、ニューハンプシャーという州が全米で最初に大統領を選ぶということを決めたからであります。いかに経済上、政治上の波及効果を持っているのかということがおわかりいただけるかと思います。

このニューハンプシャーの中で、手に負えない27人、全米で一番重い一票を持っている27人と言われる人たちがいます。ニューハンプシャーのカナダ国境に近い山の中にハーツロケーションという村があります。そこの有権者はわずか27人。このハーツロケーション村の方々は、今度の場合ですと1月8日に予備選挙が行なわれ、そして11月4日に大統領選挙が行なわれたんですけども、その日の午前0時を喫して投票をするという人たちであります。

有権者が27人でありますから、あっという間に開票事務は終わる。ここは村長さんも開票事務の人達も全員ボランティア、なぜならば税金を払っていないですから、ノーサービスノータックスつまり税金が無い故に公共サービスがありませんので、自分達でやらなければいけないということで、投票を終えた後ただちに、今度は開票要員になって票を開くということになります。

投票に要する時間4分50秒、開票に要する時間58秒という感じで、つまりほとんど5分後には結果が明らかになるということです。ハーツロケーションの人達の審

判というのが全米に速報されるということになります。メディアはそこに出かけて行って、その開票結果を速報するということになります。

つまり人々が投票に行く以前に、ハーツロケーションの結果として全米に知らされるということになりますから、とりわけニューハンプシャーの中でも影響力が大きいということになります。

このニューハンプシャーのハーツロケーションの投票結果を知ろうというために私自身もやったのですけれども、戸別訪問をして誰に投票するのか、民主共和両党の色分けは済んでおりますから、インディペンデントと呼ばれる無党派層の人達が若干いて、その人達を訪ねて行く。

マカリスターさんという剥製を作っているおじさんは最後迄どちらに入れるのかというと例年明らかにしないのですけれども、いちおう取材に行かなければということで、「ジョン・マカリスターさん、もう決めましたか?」と言うと、我々の顔を見て「いやあ、まだなんだ。」「どうしてなんですか?」と聞くと、2000年大統領選挙では「ブッシュにはまだ一回しか会ってないし、アル・ゴアは一回…」と、まだ大統領候補にじっくり会って話していないので、決められないと。いかに重い1票を持っているのかということがおわかりいただけるかと思います。

1960年のあのケネディ対ニクソンの伝説となった激戦の際も有権者が12名。事前の票読みでは5票がケネディ、5票がニクソン、あと2票をめぐって激烈な多数派工作が行われた。その村の年配の人たちはジョン・エフ・ケネディが自ら訪ねてきて、「スーザンへ(ディアスーザン)」と書いた大きなプロマイドを持っているのですけれども、もらい続けていますので大抵は押し入れの中にしまってある。そんなことは珍しいことではないのです。

このハーツロケーションとニューハンプシャーから、私の郷里である北海道の方々はぜひアイディアを取り入れていただきたいと思います。これは公職選挙法を変える必要は無いのでありますまして、民主そして自民両党の党首選をまず北海道でやる。実際にニューハンプシャーはそうなったのでありますけれども、ニューハンプシャーというところで、北辺の人口は小さくてもユニークな州というものの政治的な主張を十分汲み取って、その人々の支持を得るというためのキャンペーンを当然ながら政治家はすることになりますから、そうした舞台を用意するというだけで、まさにその地方の意向が国

政の中に、そして大統領の次の4年間の施策の中に色濃く反映されてくる。

これこそがまさにWay of American democracy、アメリカのアメリカ流のデモクラシーのエッセンスということになります。あのわずか所要時間40秒ほどの旧大蔵省・財務省の陳情でずっと長い廊下にいて、いちおう陳情したという屈辱的な体験をなさった方も多いたくさんおられると思います。

このニューハンプシャーの人たちはたった1秒、全米に先駆けてこの州が予備選挙を真っ先にやり、アメリカ大統領の候補、そしてアメリカ大統領を選ぶのだということによってそれ程の影響力を持っているということです。もはや陳情だと補助金をというような時代は遙かに去っておりますので、このニューハンプシャーの人達を超えるような知恵を出していただきたいと思います。

そして今、冒頭に申し上げましたように、北海道独立論というのが実は中央の力が回りかねている背景から、道州制だとか、各地方の自立論や独立論がさかんに言われてきている。私は2002年のわが高校の後輩とのいきさつもあって北海道から出てくる独立論というものについてやや注意深くみると、やや注目深くみるようになったのですけれども、正直に申しまして、ほとんど心打つようなものはありませんでした。たいていの場合は独立北海道にということでクラーク博士をなど、全く人事に偏っている。これは何を意味するのか。まさに独立北海道というのはどのような理念によって成り立っているのか、議論ができるないゆえのごまかしであると思います。

そしてその一方では、独立北海道を論じられるときに、もし北海道がこの段階で独立するとすれば、今中央からこれだけの補助金、交付税をもらってきてるのでその出し入れでいうと財政が自立をしない、もしくは北海道の出荷額はこのくらいであって、そしてバランスシートが合うのかどうかつまり現状の数値を当てはめてどの程度の自立が可能であるのか、統計的に議論をしたものや、政治的な仕組みもこれだというものにはほとんど出会った試しがありません。やはり北海道の自立や独立を考える時には、なぜ我々は何のために独立を目指すのかという理念についてより深く議論をされて然るべきなのだと思います。

北海道独立論の中で、冒頭に申し上げました、梅棹忠夫さんの論文だけは、非常に優れているように思います。当時彼は北海道の中に4つの選択肢がある。政

治的に中央に従属するのか、政治的に自立をするのかをこれを横軸に取り、縦軸には独自の北海道の文化や産業。デンマークの共同経営なども視野に入れた新しい酪農の在り方というものと、米作りというものを介して文化的産業的に本州に同化するのか。一つの選択肢として政治的には中央にまったく従属し、その代わり補助金をもらう。そして米作りというものを通じて、言ってみれば農水省のまったく下請けになってしまう。経営の自由というのはその段階で事実上限りなく奪われてしまう。そういう選択肢が1つ。そういうのをまったく排したものとして独自の北海道流の政治的にも独立する北海道独立論。無論、梅棹忠夫という人はその道がいかに困難であるのかを知りながらも、こうした北海道独立の可能性がわずかにあるということを言いたかったに違いないのであります。

しかし戦後50年以上たって、私たち北海道が選んだ道というのは、残念ながら、その第4番目のもっともとてはいけないはずの道。中央に政治的にも財政上でもまったく従属をし、ついに北海道らしい本当の意味での文化や産業を十分に生み出すことができない、それゆえに今日の経済的な疲弊があるのではないかと思います。

しかし個人のレベルで言いますと、北海道独立を志向した人達もたくさんいるわけであります。例えば、ノーザンファームの吉田ファミリー。私は現にそこに執筆の事務所を持ち、そしてそのファミリーを自信を持って皆様にご紹介することができるのです。おそらく世界で一番強いサラブレッドであるのに違いないディープインパクトという名馬を生んだノーザンファームは、それに先立つ社台ファームの時代から、実は設立の時から1円の農業補助金ももらっておりませんし、強いサラブレットを育成するという点ではまさしく独立王国であると思います。その証拠にノーザンファームの領地に1歩でも足を踏み入れていただけたら、たちまち景觀が一変するという、隅々まで新しい文字通りサラブレッドの世界でのフロンティアの志が行き渡っている独立王国なのであります。吉田家の場合は南部藩から入植してきた屯田兵の北海道世代の開拓の第一世代と申し上げてよろしいのですけれども、そういう血をずっと受け継いでいる人々であります。

そして少し難しい本で恐縮ですけれども、ナチスの迫害をドイツから逃れてフランスで無国籍者になり、やがてアメリカに亡命した政治学者、ユダヤ人の女性



政治学者ハンナ・アレントという人の本。全体主義の起源と言ってスターリン軍とナチス軍の起源についての書物を残した20世紀最大の思想家の一人であります。

この方、晩年はニューハンプシャーに近いメイン州というところに仕事場を構えてずっとそこで生涯を送った人であります。ヨーロッパの全体主義の嵐を身を以て体感した人でもあるのですけど、この方は後にアメリカの革命について書いていまして、題が『革命について』。レーニンからスターリンに至ったロシア革命やフランス革命の例をひきながら、あれは本来の意味での革命の名に値をしない。なぜならば上部の構造での革命である。政治革命、そして政治の権力闘争はそこで行われたけれども、本当の意味での幅広い経済的・社会的な革命を成し遂げた訳ではない。人類の史上で唯一本来の革命の名に値する、こうした試みに成功したのは辛くもアメリカの民主主義、アメリカの独立革命だけなのだ、と書いています。

ニューイングランドの独立をした農民達のことを書きながら、独立・自立をした農民達を数多く存立させる仕組みを作ったことによって、アメリカの人々がそこを自らの精神の言ってみれば王国として、自分たちのテリトリー、領土を一人一人が築き上げ、その基礎の上にアメリカの民主主義が成り立っている。これこそが革命の名に値するものだと述べています。つまり本当の意味での革命というのはおそらくハンナ・アレントがいったように、政治的な分野での革命にとらわれず、それを成り立たせているような構造、一種の政治・経済・産業という分野で人々の繁栄と自立を成し遂げるものでなければいけ

ないということを言ったのだという風に思います。

そのハンナ・アレントがまさに革命の本当の姿だと、それを見立てた場所こそアメリカのニューイングランド。あのクラーク博士を生んだニューイングランドでありまして、いろんな意味で北海道と共通点が多いと思います。何も私はアメリカの民主主義が優れているなどということを一方的に言い立てているジャーナリストではありません。むしろその正反対と申し上げていい論者なのですありますけれども、しかしあメリカ民主主義の中に流れているそうした伝統、基礎というのは決して軽視できないのだと思います。

そして最後に申し上げておきたいのですけれども、この北海道を取り巻く環境は一見厳しいように見えるのですけれども、やっぱり将来の大きな光がさしているように思います。地球温暖化というのは確かに人類に、そして地球に大きな最悪をもたらしております。しかしその反面で北海道というところに限ってみると地球温暖化というのはいくつかのチャンスをもたらしているとみて間違いがないのかなと思います。

地球儀の上の方、温暖化の故に北極海の氷が解け、今北極の北西航路というのが開かれつつあります。人類で今最も繁栄しているEUという場所と、この東アジアを北極海で結んで新しい航路が開かれています。これはパナマ運河やスエズ運河が開かれた以来のまさに流通革命、8000kmの行程が短縮されるということになるので、大きなチャンスです。今、稚内の港が疲弊しているように見えますけれども、その戦略的な価値が飛躍的に高まっている。

そして2つめには温暖化の故に、皆様の暮らしている北海道の土地そのものが大きなチャンスといいますか価値を高めている。ドバイの王様も次々に北海道の牧場を買っている。大きな牧場もいまやドバイのものになりましたので、北海道の牧場のいくつかは早くドバイになりたいというふうに真剣にいわれているような人もいる。

そして最後にもう1つ。CO2二酸化炭素、温室効果ガスというもの一つをとっても、ついこないだまでは人類はそれを一種の廃棄物とみなしておりましたけれども、そのCO2に特にそういう分野での先進地域でありますヨーロッパ、とりわけイギリスではそこに大きな価値をみいだしておりまして、キャッチアンドトレード排出権取引が成立しております。皆さんはお気づきであったかどうか、実は洞爺湖サミットに来られたブラウン首相

のポケットには7枚の提案書が秘められておりました。いろんな事情があって遂に彼はその提案をきくことが無かったのですけれども、実は単に排出権取引をという超えて、凋落しつつあるドルに変わって、CO2がカーボン通貨として、未来の基軸通貨になるという提案がありました。そのようにこれまで廃棄物としてやっかいものであったものが、新しい価値として、ましてや基軸通貨ドルに変わろうかという座に座りつつある、それほどまでに世界は変わりつつあるということあります。

環境のために、これほどの広大な緑の大地を抱えている北海道は、圧倒的な優位に立たない筈がないのであります。その点でも北海道は売りか買いかということありますと、もちろん優先して買いということになります。その大地に住んでお仕事をされている方々のみなさんの未来は大変明るいものがあるという私は確信しております。有り難うございました。